

ブラインドスキー参加者の意識

—— アンケート調査の結果から ——

渡辺文治（神奈川県総合リハビリテーションセンター 七沢ライトホーム）

視覚障害 障害者スポーツ ブラインドスキー ボランティア

はじめに

視覚障害者の間で人気のあるスポーツの一つにスキーがある。神奈川県ではすでに12年にわたり実施されてきた。アルペンにしるクロスカントリーにしる視覚障害者がスキーをする場合にはゲレンデの状況を知らせてくれるパートナーが必要である。このパートナーはほとんどの場合ボランティアが行なう。今回は視覚障害者のスキー、ブラインドスキーに参加した視覚障害者とボランティアを対象にブラインドスキーに対する考え方を知るためにアンケート調査を行なった。

調査方法

晴眼者には墨字の、視覚障害者（以下視障者と略す）には点字と墨字の双方のアンケート用紙を使用して郵送による調査を行なった。

期日 1989年2月

対象者 ブラインドスキー（第4～10回）に参加した者（視障者・晴眼者）

回答数 視障者 18名/30名、晴眼者39名/55名

調査項目 項目が多岐にわたるため結果と考察にその一部を示す。

結果と考察

表1 参加者の年代 (%)

	10代	20代	30代	40代	50代
視障者	16.7	33.3	33.3	5.6	11.1
晴眼者	0.0	25.6	48.7	17.9	7.7
計	5.3	28.1	43.9	14.0	8.8

参加者については表1、2に示すように、視障者は20～30代が66.7%、10代を含めると83.3%を占め比較的若い層が中心であることが分かる。晴眼者でも20～30代が74.3%、全体で72.0%と若い参加者が中心となっている。

表2 参加者の性別 (名)

	男	女	不明	計
視障者	9	7	2	18
晴眼者	18	15	6	39
計	27	22	8	57

表3をみると参加1～2回の者が視障者では44.4%、晴眼者で48.8%計47.4%と半数を占めている。一方、5回以上参加している者は視障者27.8%、晴眼者30.8%計29.8%と約3割を占め、視障者晴眼者ともに中心となる部分の存在を示している。ブラインドスキーをどこで知

ったか、には視障者の半数近い44.4%、晴眼者の33.3%が“友人知人からと答えた。また晴眼者の25.6%が“ライトセンター（県内の利用施設）”からと答えた。

なぜ参加することにしたか、という問には視障者、晴眼者とも半数程度の52.6%が“ブ

表3 参加回数

(名)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
視障者	2	6	2	1	2	3	1	1	0	0
晴眼者	15	4	2	3	3	3	3	1	2	3
計	17	10	4	4	5	6	4	2	2	3

ラインドスキーへの興味”をあげている。また、晴眼者の20.5%が“友人からの誘い”と答え、“頼まれて”という答を含め25.6%が誘われて参加している。

表4 自由時間について

(%)

	少ない	普通	多い
視障者	0.0	94.4	5.6
晴眼者	20.5	71.8	7.7
計	14.0	78.9	7.0

参加の感想は“楽しかった”という者、視障者94.4%、晴眼者84.6%、“満足”と答えた者が視障者77.8%、晴眼者43.6%で、晴眼者に“楽しくなかった”者1名、“不満”が2名あった。また、プログラムに対しての不満はなかったものの“自由時間が少ない”との答が晴眼者の20.5%にあり、行動が制約されることに対する不満やパートナーとしての役割が人によっては予想外に大変なことを示しているものと考えられる。

表5 参加費について

(%)

	高い	普通	安い	無回答
視障者	0.0	50.0	38.9	11.1
晴眼者	7.7	76.9	15.4	0.0
計	5.3	68.4	22.8	3.5

表4に自由時間について示した。視障者は1名を除き“普通”と答えている。晴眼者は“多い”が7.7%で少ないが20.5%とボランティアのなかでの感じ方の違いを示している。

表6 参加費同額について

(%)

	不満	やむをえず	特に無し	当然	無回答
視障者	11.1	27.8	38.9	16.7	5.6
晴眼者	2.6	28.2	38.5	28.2	2.6
計	5.3	28.1	38.6	24.6	3.5

参加費について表5に示した。視障者は“安い”が38.9%で“高い”という者はなかった。晴眼者では“高い”が7.7%、“安い”が15.4%となっている。また、表6に示した参加費が同額であること

についてどう考えるかでは全体の約1/3が“不満”、“やむを得ない”と答えている。一方、“当然”という答えも1/4近くあり考え方の違いを示している。

なお、これからも参加したいと思うかという問には、視障者は全員が、晴眼者は87.2%が“参加したい”と答えているが“参加したくない”という答えも7.7%あった。

全体としては好意的な回答が多かったが参加者のなかにある考え方の違いもある程度はつきりしたと考えてよいだろう。

おわりに

現在神奈川県下では障害者自身の手で視覚障害者スキー協会が結成され、活動を行っている。しかし、初心者を受け入れや指導者の確保といった面ではまだ対応できない部分も多い。ボランティアの養成という問題も抱えている。今回の調査は例数が少ないことや参加したボランティア全てから回答を得られなかったため、多少偏った結果になっていると思われるが一定の傾向は明らかになったのではないだろうか。結果のなかで明らかになってきた参加費や自由時間の問題は今後の視障者のレク・スポの拡がりのうえでも考えられなければならないボランティアと障害者の関わりの本質にかかわる。現実の活動を通して解決すべき問題といえよう。